

英語科・英語活動

英語科・英語活動部 齋藤 一紀 原 雄規
研究協力者 津久井貴之

Ⅰ 英語科・英語活動における教科本質的な学びについて

目的や場面、状況等のある言語活動を通して、他者と考えや気持ちを分かり合い、コミュニケーションを行う楽しさを実感する学び

英語科・英語活動の本質的な意義の中核をなす見方・考え方は「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」である。この見方・考え方を踏まえ、英語科・英語活動の教科本質的な学びを「目的や場面、状況等のある言語活動を通して、他者と考えや気持ちを分かり合い、コミュニケーションを行う楽しさを実感する学び」とした。本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するためには、英語科・英語活動の本質的な学びが欠かせない。なぜなら、他者と共によりよい生活を創造していくためには、他者と考えや気持ちを伝え合い、互いを分かり合うことを通して、よりよい関係を築いていくことが必要だからである。英語科・英語活動の学習では、考えや気持ちを伝え合う際に日常生活では使用しない不慣れな英語を用いる。不慣れな英語を用いるということで、子どもたちは、課題意識や困り感を感じながら、言語活動に取り組むことになる。そこで、目的や場面、状況等に応じて、何とか自分の考えや気持ちを他者に伝えようとしたり、他者の考えや気持ちを分かろうと聞いたりすることを通して、分かり合えた際に喜びを感じ、コミュニケーションを行う楽しさを実感できる。このように、他者と考えや気持ちを分かり合おうと試行錯誤し、コミュニケーションを行う楽しさを実感した子どもたちは、実生活において他者と考えや気持ちを伝え合う際にも、互いに分かり合えるコミュニケーションを行おうと粘り強く取り組むことができ、共によりよく生きていくことができる生活を創造していくことにつながっていく。

2 研究の方向

英語科・英語活動の教科本質的な学びは「目的や場面、状況等のある言語活動を通して、他者と考えや気持ちを分かり合い、コミュニケーションを行う楽しさを実感する学び」である。この教科本質的な学びにおいて、他者と協働して問題解決的な学習を行うことは、コミュニケーションを行う楽しさを実感することができるようになることを意味する。子どもたちは、単元の課題（以下 Unit Goal）の解決に向けて、必要な英語表現に慣れ親しんだり、英語表現の選択・組合せをしたりしながら、言語活動に取り組む。その中で、話し手は、目的や場面、状況等に応じて、自らの考えや気持ちを聞き手に分かってもらえるように伝える。聞き手は、話し手が考えや気持ちを伝えやすいように、話し手に反応をしながら聞く。このように、話し手と聞き手が互いに相手意識をもち、配慮し合いながらコミュニケーションを行うことができるようになると、コミュニケーションを行う楽しさを実感できる。

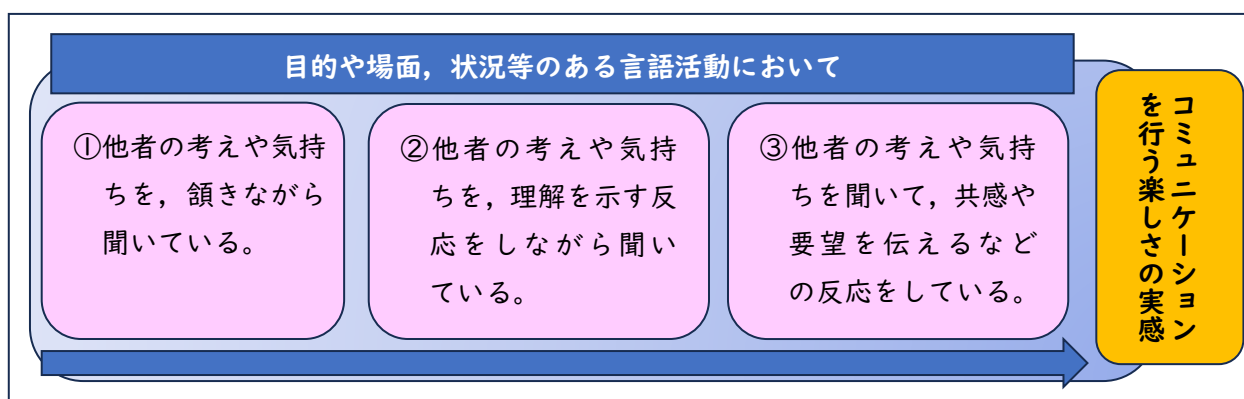
したがって、英語科・英語活動の学びの中で、大切にしたい非認知能力「他者と協働する力」は、言語活動の中において、話し手と聞き手が互いに相手意識をもち、配慮し合いながら、コミュニケーションを行う楽しさに向かって発揮される。

ここで、英語科・英語活動の教科特性に着目すると、子どもたちは自分の考えや気持ちを何とか他者に伝えたいという課題意識をもち、試行錯誤しながら言語活動に取り組む。この姿は、話し手として粘り強く取り組もうとする姿であり、話し手が聞き手に伝わるように話そうと配慮している姿である。しかし、自分の考えや気持ちを伝えられるようになりたいという意識が強くなり過ぎることで、話し手が話しやすいように聞こうと、聞き手の話し手に配慮する意識が薄れる傾向にある。聞き手の話し手に配慮する意識が薄れると、反応をせずに聞いている姿が見られるようになり、互いの考えや気持ちを分かり合うことはできず、教科本質的な学びには至らない。

そこで、教科本質的な学びの中で、話し手が話しやすいように配慮しながら聞きたいといった聞き手意識を高め、英語を用いてコミュニケーションを行う楽しさを実感することに向かって「他者と協働する力」を発揮する子どもの姿が現れるように、研究を進めていくこととした。

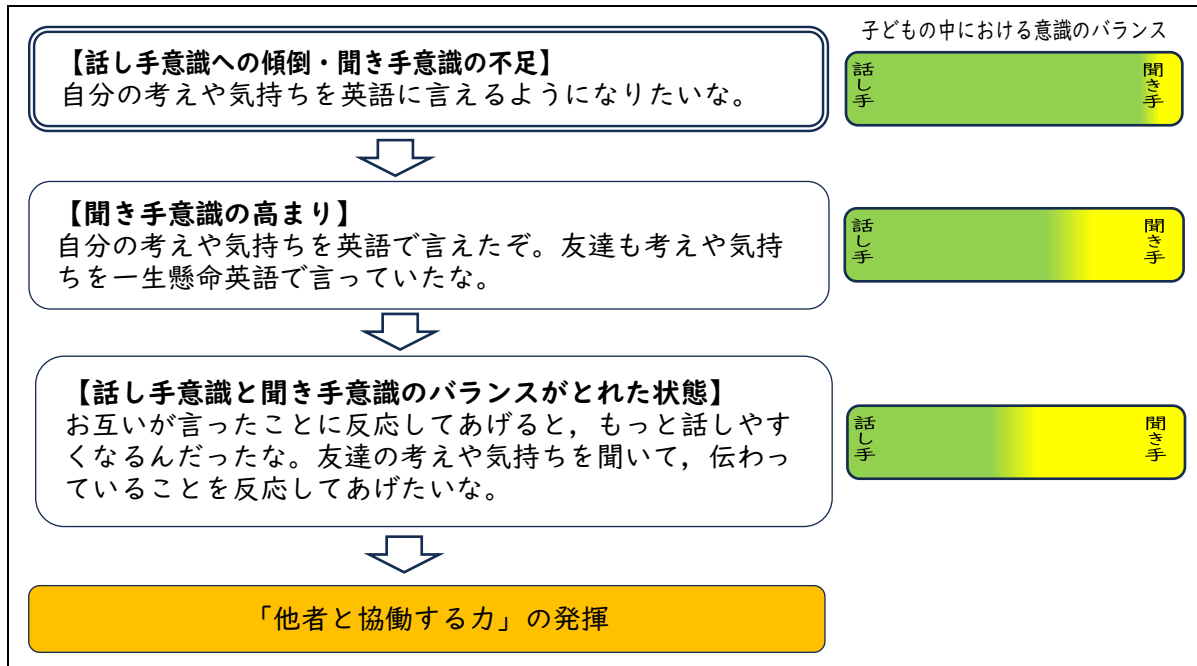
3 研究内容

(1) 「他者と協働する力」が発揮された姿



英語科・英語活動では、目的や場面、状況等のある言語活動において、聞き手が「他者と協働する力」を発揮した姿を3段階に分けた。この姿は右の段階ほど、聞き手が相手意識をもち、話し手が話しやすいように反応しようとする思いが高まっている姿である。この姿が現れることで、コミュニケーションを行う楽しさの実感につながる。①のうなずきながら聞く姿は、話し手に安心感を与えようとする姿である。この姿が現れることで、話し手は自分の考えや気持ちを伝えやすくなる。②の理解を示す反応をしながら聞く姿は、話し手に考えや気持ちが伝わっていることを実感してもらおうとする姿である。この姿が現れることで、話し手は考えや気持ちが伝わる喜びを得ることができるとともに、自分の考えや気持ちを伝えやすくなる。そして、③の共感や要望を伝えるなどの反応をする姿は、話し手が自分の考えや気持ちを一生懸命伝えていることを受け止め、話し手とのコミュニケーションをお互いにならぬように楽しもうとする姿である。この姿が現れることで、話し手は、自分の考えや気持ちを受け止めてもらっている安心感を得るとともに、自分の考えや気持ちを伝えやすくなる。③の姿には、「Me, too.」や「Oh, you like baseball.」等の英語表現を用いて共感を伝えたり、「One more please.」などの英語表現を用いて要望を伝えたりする姿が想定される。これらの姿は、子どもたちの発達段階や実態、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等によって異なる。

(2) 学びのプロセス



子どもの中における意識のバランスとは、言語活動における、子どもたちの話し手意識と聞き手意識のバランスを表している。話し手意識とは、自分の考えや気持ちを他者に伝わるように話そうとする意識を表す。聞き手意識とは、話し手が話しやすいように反応をしながら聞こうとする意識を表している。教科の特性上、単元の導入において、子どもたちは自分の考えや気持ちを伝えられるようになりたいという話し手意識に傾倒しやすい。しかし、コミュニケーションを行う楽しさを実感するためには、話し手意識だけでなく、聞き手意識を醸成し、高め、話し手意識とのバランスをとる必要があると考える。

(3) 学びのデザイン

①教科本質的な学び

英語科・英語活動の教科本質的な学びを踏まえ、英語科・英語活動を学ぶよさを子どもたちと、学期始めや単元内で繰り返し共有をする。その中で、子どもたちとともに、英語科・英語活動を学ぶよさを、「コミュニケーションを楽しく行えるようになること」と捉えた。そして、各学年の発達段階や子どもたちの実態や思いに応じ、コミュニケーションを行う際に大切な姿勢や気持ちを基に「目指すコミュニケーション」について考えを出し合った。

【つかむ】過程では、Good Communication Sheet (図 1) を活用しながら、Unit Goal を設定し、単元のゴールに向けた見通しをもつ。【追究する】過程では、言語活動に取り組み、その後、目指すコミュニケーションとの比較を

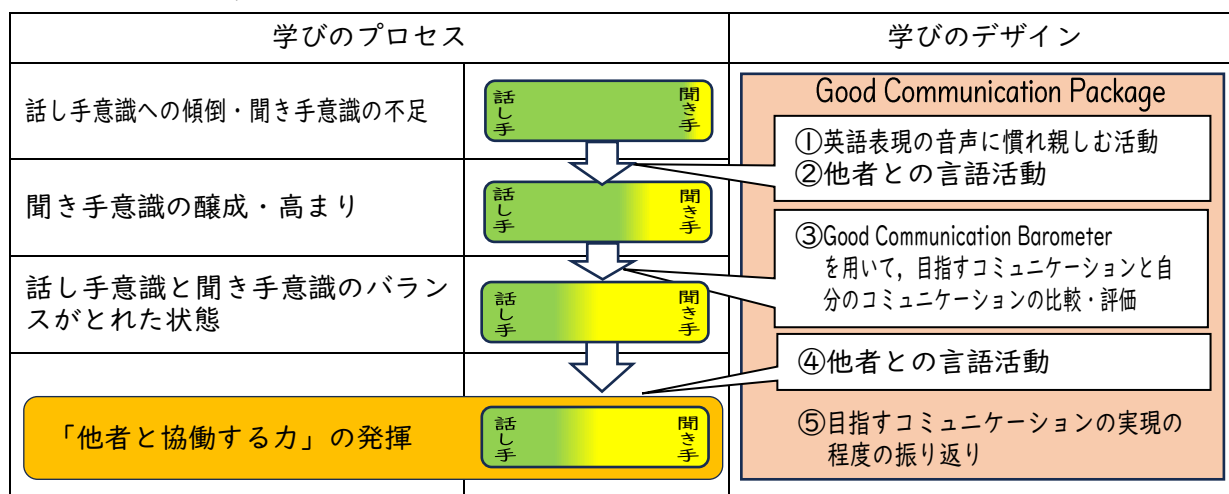
する。これを繰り返すことで、言語活動が目指すコミュニケーションへと近付き、コミュニケーションを行う楽しさを実感していく。そして【まとめる】過程では、分かり合えたことや伝えられるよう



＜図1 学ぶよさを子どもと共有する際に活用する
Good Communication Sheet の例＞

になったこと、より充実したコミュニケーションにするための要素ついて振り返り、楽しいコミュニケーションを行おうと、次の学習へとつなげていく。

②プロセスを生む、学びのデザイン



目指すコミュニケーションに近付けていくために、自らのコミュニケーションを比較・評価する、Good Communication Package の設定

話し手が自分の考えや気持ちを話しやすくなるようにしたいという、聞き手が話し手に配慮する「他者と協働する力」を発揮するためには、話し手意識に傾倒した状態から、聞き手意識を高め、話し手意識と聞き手意識のバランスを保つことが必要になる。そこで、Good Communication Package を【追究する】過程で設定する。この学習指導の工夫では、まず、言語活動に必要な英語表現の音声に慣れ親しむ活動（①）や他者と考えや気持ちを伝え合う言語活動（②）を行う。言語活動を通して、自分の考えや気持ちを表現できるようになってきたことを実感し、他者も同様に自分の考えや気持ちを一生懸命伝えていることに気付く。言語活動後には、タブレット内の Good Communication Barometer を活用し、モデル動画やデモンストレーションを視聴し、目指すコミュニケーションと自分が行ったコミュニケーションを比較・評価する（③）。Good Communication Barometer は、Good Communication Sheet や振り返りシート（以下 Try Sheet）に記載した目指すコミュニケーション（話し手と聞き手のバランスがとれた姿）を３段階にレベル分けしたものである。Good Communication Barometer を用いて比較・評価したことで、目指すコミュニケーションと自分のコミュニケーションの違いに気付き、コミュニケーションを行う楽しさを実感するために必要なことを考えるきっかけとなる。その後、再び言語活動に取り組み（④）、自らのコミュニケーションを目指すコミュニケーションに近付けていく。そして、単時間の終末や単元の終末には、自分のコミュニケーションを振り返ることで、成果を自覚したり、コミュニケーションを行う楽しさの実感に向けて必要なことをさらに見付けたりする（⑤）。この際、教師は、子どもたちが、聞き手として話し手に配慮する姿を称賛したり、その姿が現れたことでコミュニケーションを行う楽しさの実感につながったことを価値付けたりする。この学習指導の工夫により、聞き手は、話し手が話しやすいように反応をする「他者と協働する力」を発揮し、英語を用いたコミュニケーションを行う楽しさを実感することができるようになる。

5 成果と課題

本校英語科・英語活動における問題解決的な学習の中で、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて、「他者と協働する力」を発揮する学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

子どもたちは、聞き手として、話し手が自分の考えや気持ちを話しやすくなるよう、うなずきながら聞き手の話を聞いたり、"OK."や "I see."を用いて、理解を示したりする姿が見られた。また、話し手と同じ考えや気持ちの際は、"Me, too."を用いて、共感する姿が見られた。これらの姿は、英語を用いてコミュニケーションを図ることに向けた「他者と協働する力」が発揮された姿と言える。この姿が表れた要因は、子どもたちが、Good Communication Packageを通して、聞き手が話し手に反応をすることで、話し手が話しやすくなることを実感できたり、もっと他者とコミュニケーションを図りたいという思いが高まったりしたためだと考えられる。さらに、英語科・英語活動を学ぶよさや「目指すコミュニケーション」を共有したことにより、話し手に配慮しながら聞くこともコミュニケーションを図る上では大切だと子どもたちが自覚することができたことも要因として考えられる。

○課題

子どもたちの活動の様子から、聞き手として、話し手の考えや気持ちを、ずっとうなずきながら聞いていたり、"I see."という同じ英語表現のみを繰り返し用いたりする姿が見られた。これらの姿は、話し手が話しやすくなるよう配慮しようとする聞き手の「他者と協働する力」が発揮されている姿と考える。しかし、聞き手がずっとうなずきながら聞いていたり、同じ英語表現を繰り返し用いて反応をしたりすることは、話し手にとって新鮮な反応ではなくなり、聞き手に伝わっている実感をもちにくくなる場合がある。また、コミュニケーションが単調となり、コミュニケーションを行う楽しさを実感しにくくなる場合もある。そのため、今後は、反応をすることに加え、話し手が伝え始めるのを待ったり、最後まで話を最後まで聞くようにしたりするなど、それぞれの話し手に応じた配慮について考える必要がある。

【参考文献】

- ・木村明憲（2023）『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』明治図書.
- ・酒井英樹（2023）『小学校の外国語活動・外国語科 基本のき』大修館書店.
- ・サラ・マーサー，ゾルタン・ドルニエイ（2022）『外国語学習者エンゲージメント』，アルク.
- ・中山芳一（2020）『家庭，学校，職場で生かせる！自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』東京書籍.
- ・西田理恵子（2022）『動機づけ研究に基づく英語指導』大修館書店.